

俺はゴブリンだ

ザイグ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ゴ布林スレイヤー。

竜や吸血鬼ではなく、最弱の怪物である小鬼を殺す者。

なら、竜や吸血鬼の力を持ったゴ布林がいたら？

吸血鬼に噛まれて吸血鬼の力を得て、竜を殺して竜の力を得たゴ布林。

「別に欲しくて得たわけじゃない。ただ生きるのに必死でこれだけの力を得ただけさ」

これはゴ布林スレイヤーがゴ布林を殺す物語ではない。ゴ布林に転生した者が生き残る物語である。

# 目次

五ゴフ	四ゴフ	三ゴフ	二ゴフ	一ゴフ
58	44	30	17	1



# 一ゴブ

二度目の人生は波乱万丈だった。

まず転生したのがゴブリンだった。

次に今世がゴブリンスレイヤーの世界だと知った。

俺はゴブリンで、主人公はゴブリン絶対殺すマン。死亡フラグがとんでもないことになっていた。神様が俺を殺しにきているとしか思えない。

その証拠に、転生したばかりのまだ子供だった時に冒険者に巣穴が滅ぼされ、たった独り生き残った。

ゴブリンは子供程度の背丈、膂力、知力しかない。そのゴブリンの子供ともなれば人の子にも勝てないほど脆弱だ。

飢えて死にそうになった。獣に襲われ死にそうになった。人に追われて死にそうになった。

ゴブリンの巣穴に住み着けば冒険者に滅ぼされる。逃げ出して他の巣穴に住み着けばまた冒険者に滅ぼされる。その繰り返し。

なんとか生き延びて同じ巣穴に留まっても無意味と知った俺は『渡り』と呼ばれるは

ぐれゴブリンになった。

『渡り』として傭兵の真似事をしていると身体がゴブリンとは思えないほど成長した。どうやら過酷な環境が先祖帰りを起こし、大型な肉体を持つホブゴブリンに進化したようだ。

更に運が良いことに、渡り歩く巢穴の一つで強力な魔剣も手に入れた。

魔剣を持ち、冒険者から奪った鎧を着込み、屈強な肉体を得た俺は強かった。鋼鉄等級の冒険者一党パーティくらいなら単独で撃破できるほどだ。

だから調子に乗ってしまった。散々な目にあつた仕返しをするように、ゴブリンの群れを率いて人の村を襲った。

襲撃は成功した。でも、レイア 圃人の老人が現れて同胞が次々と首を刎ねられ、俺も刎ねられかけた。

なんとか逃げ延び、人はまだまだ俺より強いということを知った。生き残るためには更に強くなる必要がある。

それから俺は『渡り』を続けて各地を転々とした。冒険者と戦って剣術を覚え、ゴ布林シヤーマンに教えを受けて魔法を覚えた。

遭遇した冒険者は一人残らず始末した。情報は武器だ。俺というゴブリンがいること、戦い方、呪文が使えること。どれか一つ知られるだけでも生死に関わる。だから、容

赦はしない。

そして俺はさらなる成長を遂げた。身体はホブゴブリンを超える巨軀。人の二倍近い背丈があり、張り詰めた筋肉は弾けそうなほどに隆々している。

ゴブリンチャンピオン  
小鬼英雄。天性の才に恵まれたホブゴブリンが経験を重ねて辿り着くゴブリンの頂点。

小鬼における白金等級。それに俺は剣術も呪文も使えるから他の小鬼英雄より強いと自負している。

装備も革鎧から金属鎧に変え、解毒や治癒の水薬ポーションを常備した。残念なのは巨体になつたせいで魔剣が片手剣くらいの扱いしかできないことだが、これ以上の武器を持つていないので仕方ない。

恐らく現在の俺は単独で銀等級の冒険者パーティー一党さえ倒せるはずだ。

そうしてまた調子に乗ったのがいけなかったのか。とんでもない怪物に遭遇した。

具体的には吸血鬼。それも『死の迷宮』っていうところの魔神王の部下で、大いなる真祖の直系にして魔神王に次ぐ力を持った吸血鬼の王らしい。

まあ、その魔神王は五年前に討伐されて、ただの残党。むしろ五年間も何していた思うが、戦争の傷が深過ぎて回復していたらしい。

魔神王亡きいま新たな魔王になると息巻いていた。

我が下僕になれと言われたが、断った。小鬼英雄といえどゴブリンはゴブリン。吸血鬼は雑兵としか見ていなかった。そんな奴の元にいれば使い潰される。

そしたら戦いになった。吸血鬼は強かった。流星はドラゴンと並び立つ怪物の一つ。それも吸血鬼の王となればその強さは別格。

小鬼英雄を超える膂力があり、不死の如き治療力があり、奇跡を何十回も使える。勝てたのは相手が吸血鬼だったからだ。

吸血鬼は弱点があり、白木の杭や銀の武器に有効だ。

だから、まともに戦ってやらなかった。白木の林に場所を変えて戦い辛くする。猛毒が塗られた魔剣で徐々に体力を奪う。銀の鉾山に誘い込み爆破して銀塊で潰す。徹底的に弱点の突き、吸血鬼を仕留めた。

でも、吸血鬼もしぶとく最後の力を振り絞って俺に噛みついてきた。

結果、俺は吸血鬼化した。でも、人ではなくゴブリンが吸血鬼化したせいで普通の吸血鬼にはならなかった。

吸血小鬼<sup>ダンピール</sup>。吸血鬼の力を得たゴブリンの変異種に俺は進化した。

外見は尖った耳と緑色の肌以外は人と酷似し、背丈も半分くらいに縮んだ。だが、膂力は小鬼英雄より遙かに強く、戦いで負った瀕死の傷もすぐに完治する治療力を得た。

更にあくまでゴブリンの変異種なので、白木の杭や銀の武器といった吸血鬼の弱点も



ない。

吸血小鬼になった俺は人に近い容姿になった。個人的に髪がふさふさになったのが嬉しい。ただそうなるといままでの簡素な腰巻などではあまりにみすばらしいので人の服が欲しくなった。鎧や持ち物は戦闘でなくなった。

そこである開拓村に目をつけた。森を開拓している辺境のその最端にある村だ。ここなら何が起きてもバレない。

それに丁度、どこかの巢穴を追われたゴブリンの群れもいる。欲しいものだけ貰ってとんずらすれば、残るのは、『ゴブリンの群れに襲われて村が一つ滅んだ』という結果だけだ。

この世界ではゴブリンの被害は日常茶飯事。誰も気にもとめず、俺がいたという証拠も残らない。

「雨か……」

「GOORBGRGO!」

「わかったわかった。そう喚くな」

時刻は夜。夜はゴブリン達の世界だ。ゴブリンは真つ暗闇でも昼間のように全てが見えている。

更に今日は暗雲が月明かりさえ隠し、雷鳴が足音も消してくれる。只人（ヒューム）は

村にゴブリンが入ったことにも気づかないだろう。

「格好の襲撃日和。それじゃ行こうか同胞たち」

「GOORBG!!?」

ゴブリンの群れを率いて俺は開拓村に向かった。



開拓村には柵があった。昨日まではなかったものだ。それも横棒の間隔が広く、ゴブリンの手が届かない工夫がされている。

(どう見てもゴブリンを想定した柵だな。それに誘い込むように紐が括られていない箇所がある。ゴブリンは馬鹿だから罠とも思わないな……まあ、関係ないが)

俺は柵に蹴りを一発。巨人にも勝るとも劣らない脚力は只人の小細工を簡単に吹き飛ばした。

阻むものがなくなったゴブリンの群れが雪崩れ込む。その後ろを歩いて行く。

俺の目的は火事場泥棒だ。ゴブリンの主目的である食料や女には違い、衣服や道具が目当てなので焦る必要はない。

只人の悲鳴を聞き流して俺は近くの民家に侵入した。

都合良く若い夫婦が住んでいた。彼らには永遠の眠りについてももらい、衣服を奪い、使えそうな物を背囊に詰める。ついでに外套も頂いた。

容姿が人に近くなつた分、個体を特定されやすくなつたから隠すためにフードをかかぶる。

欲しいものは手に入れた。あとはゴブリンが暴れている間にとんずらしようと出れば、同胞の悲鳴が響いた。

そちらを見るとゴブリンが冒険者に斬られていた。事前に冒険者にゴブリン退治を依頼していたらしい。

だが、俺は同胞が斬られたことより、その冒険者の格好に唾然とした。

角の折れた鉄兜、薄汚れた革鎧、手には中途半端な長剣、腕に括つた小振りな円盾。

ただの空似かもしれない、偶然かもしれない。でも、俺は何処かで確信していた。自然と彼の名は呟く。

「小鬼を殺す者……!」

原作の主人公。今世における俺の死神。最も会いたくなつた天敵に出会ってしまった。

(どうする? ゴブリンスレイヤーはゴブリンの天敵、逃げるべきか? だか、俺は吸血小鬼ダンピール、小鬼英雄チャンピオン以上の力を得ている。負けるはずがない)

それに首に下げた認識票は白磁等級。駆け出した。

膂力、経験、技量、武器。全てこちらが圧倒的。防具と道具がないのが心許ないが、負ける要素はない。

ならば原作など知ったことではない。将来脅威となるならここで始末する！

吸血小鬼は魔剣を抜き駆け、一瞬でゴブリンスレイヤーに肉迫する。

魔剣を振り抜く。ゴブリンスレイヤーは盾で防ぐがバターのようになり斬り裂かれた。咄嗟に後ろに跳んだよう腕は少ししか斬れていない。

だが、それでいい。おれの魔剣にはたつぷりと猛毒が塗ってある。

「!?? なんだ、お前は……!」

「ゴブリンだよ!」

振り抜いた遠心力を使い、回し蹴りを放つ。ゴブリンスレイヤーの腹部にオーガを超える威力が直撃し、彼は吹き飛び民家に突っ込んだ。

更に俺は追撃。いままで死んでいてもおかしくないし、毒で死ぬかも知れないが、相手はゴブリンスレイヤー。何をするかわからない。確実に葬る!

「《カリブ<sup>火</sup>ンクルス……クレ<sup>成</sup>スクント……ヤク<sup>投</sup>タ》!」

《ファイア<sup>ボール</sup>》。広範囲を焼き尽くす呪文が民家もろともゴブリンスレイヤーを焼却した。

(……? この程度、あのゴブリンスレイヤーが? いや、駆け出し冒険者ならこんなも

のなのか……?)

あまりの呆気なさに疑問を抱きながら吸血小鬼はその場を離れた。



冒険者がいなくなれば村の命運は尽きた。逃げ惑う只人はゴブリンに廻りものにされ、倉庫の収穫は奪われた。

残るは神殿。石造りの建物は堅く、扉も頑丈だ。

このまま籠城すれば運が良ければ生き残れたかもしれない。吸血小鬼がいなければの話だが。

彼は扉をその凄まじい膂力で粉碎し、ゴブリンを侵入させた。

中にいたのは年老いた女一人。その老婆もゴブリンに呆気なく殺された。だが、足りない。ここは孤児院も兼ねていたようだが子供が一人もいない。

そして捜索していた彼は見つけた。外壁に崩れたところがあり、子供が抜け出せそうな隙間があるのを。

逃げられたのを理解した瞬間、駆け出した。

どこに逃げたかはわかる。この村はゴブリン用の“子供が越えられない”柵で囲ま

れている。ゴブリンを侵入させないための守りが、子供を脱出させない檻と化していた。

なら、子供が逃げる道は一つ。俺が吹き飛ばした箇所から出るしかない。

たかが子供数人、見逃しても問題ないと思う。でも、俺は知っている。

ゴブリンに家族を、友達を殺され生き残った子供がどうなるか。

憎悪と糧に成長し、冒険者となつてゴブリンを殺し続けるゴブリンスレイヤーへと成り果てる。

それは吸血小鬼にとっては悪夢だ。だから、一人も逃さない。生き残る可能性を絶対に与えない。塵殺する。

吸血小鬼の脚力は子供と比べものにならない。瞬く間に村を駆け抜け、逃げる子供達の姿を捉える。

すぐさま呪文を唱え、《火球》を投げた。ばらばらに逃げられては面倒だからまとめて焼き殺す。

だが、黒髪の少女が《火球》に気づいたせいで半分に避けられた。

だが、それだけだ。逃げる子供らを俺は魔剣で斬り、素手で千切り、足で踏み潰す。そうして残ったのは黒髪の少女だった。

次々死んでいく中で最後まで諦めない彼女が生き残ったのは当然の結果だった。で

も、容赦はしない。少女を掴み、持ち上げる。逃げられないようにし、魔剣を突きつける。

黒髪の少女は足をばたつかせ、腕を振り解こうとするが巨人のごとき怪力は引き剥がせない。

魔剣を突き刺さそうとすると……。

「《カリブ<sup>火</sup>ンクルス……クレ<sup>石</sup>ス<sup>成</sup>ント……ヤク<sup>長</sup>タ<sup>投</sup>》！」

「なっ……っ？」

黒髪の少女が呪文を使った。それも先程俺が使った《火球》。恐ろしいことに少女は魔法を一回見ただけで覚え、行使してみせた。

呪文を習った俺は、それがどれだけ異常かわかる。呪文は決して土壇場で成功させれるものではないと知っているから硬直してしまう。だから、放たれた《火球》を顔面に直撃してしまった。

頭を焼かれて生きていられる者はいない。吸血小鬼は崩れ落ち、腕から力が抜けて少女を手放す。

「はあっ……はあっ……やった……仇はとったよ、みんな——」

言葉は遮られた。死んだはずの吸血小鬼が立ち上がり、黒髪の少女を蹴り飛ばしたのだ。骨が砕ける音が響き、少女の口から血が溢れる。

頭が真っ黒に炭化した状態で動き、残った片目が少女を睨む。  
蹲りながら少女は呟く。

「そ、んな……なん、で?」

「不思議だよな? 頭を燃やされて生きてるのが。ただのゴ布林なら死んでいた。だが、俺はただのゴ布林じゃない。吸血鬼の力を得たゴ布林! 吸血小鬼だ!!?」  
炭化した顔も、燃えた眼球も瞬く間に癒える。

吸血鬼、それも真祖の血を最も色濃く持つ吸血鬼の王は不死の如き治癒力があつた。吸血鬼の王によつて吸血鬼化したダンピールは脳や心臓などを破壊しなければ殺せず、瀕死の傷も癒えてしまう。

瞳を憎悪に燃やしながらも俺は油断なく少女を見据える。もはやただの子供とは思わない。容赦も手加減もなく全力で殺す!

「《大いなる真祖よ、我が敵を肅清せよ!!?」

——《極刑》。

吸血鬼固有の魔法。この身に流れる血に刻まれた真祖の力を使って起こす奇跡。

地面から生える黒い杭。金属鎧さえ容易に貫く串刺し刑。黒髪の少女に死を与えんと無数の杭が迫る。

蹴りによるダメージが深い彼女は逃げる事ができず、貫かれる——直前、疾走する



人影が少女を拐い、杭は宙を貫く。

人影 影は少女もろとも川に飛び込み、急流に呑まれた。だが、吸血小鬼は見た。少女を攫っていた鉄兜と革鎧を着込んだ乱入者。そんな只人は、冒険者は一人しかない。

「ゴブリンスレイヤー!?」 馬鹿な、確かに殺したはず!」

毒に侵され、腹に甚大なダメージ、最後は民家ごと燃やしてやったのに。どうやって生き延びた?

いや、それよりも逃げられた。追うべきか?

無理だ。嵐のせいで川は急流。流れが早く濁流のせいで川の中も見えない。どこまで流されたかもわからないのに追いかけるのは不可能だ。

それにあの怪我だ。急流に呑まれて助かる方が低い。放っておいても死ぬはずだ。だが、ゴブリンスレイヤーならまた生き延びるのではないかという不安がある。何しろ、つい先程、殺したはずなのに生きているのだから。

(奴は確か牧場に住んでたな。そこを襲撃するか? ……ダメだ。街に近すぎる。そんな危険はおかせない)

吸血小鬼は強い。それでも辺境の街の冒険者全てを纏めて相手にする自信はなかった。街には近づけない。

ここが潮時。ゴブリンスレイヤーと黒髪の少女以外の村人は始末した。新人と子供の証言だけでは吸血鬼の力を得たゴブリンがいたなんて信じる者はいない。

悍ましい宴を開くゴブリン達を無視して吸血小鬼は立ち去った。

ただゴブリンスレイヤーに顔を見られたのは失敗だった。一番知られたくない奴に顔を覚えられたと後悔した。



村の川下。激しい急流から這い出る人影があった。

角の折れた鉄兜、薄汚れた革鎧、斬られた円盾、腕や腹には応急処置をしただけの痛々しい傷、濁流の中で木や石に揉まれたせいだろう生傷だらけ。後にゴブリンスレイヤーと呼ばれる駆け出し冒険者だ。

その腕には中途半端な長剣ではなく、黒髪の少女が抱かれていた。

彼が抱き抱えていたおかけだろう。急流に流されながら目立った傷はない。

「ダンピールといったか……間抜けで助かったな」

彼が呟く。そもそも彼が生きているのはダンピールが死体の確認もしなかったからだ。蹴り飛ばされた彼は民家に突っ込み、あまりの脚力にそのまま突き破っていた。ダ

ンピールは誰もいない民家を燃やしていたのだ。

「あれは……」

だから、彼はそれどころではなかった。先程遭遇したダンピールより手に持っていた剣が思い浮かぶ。

「あの剣は……」

正確には吸血小鬼が持っていた魔剣を。彼はそれを見たことがあった。

ゴブリンに不釣り合いな見事な装飾が施された重厚な剣を見間違えるはずがない。忘れるはずない。五年前、故郷を滅ぼしたゴブリン。その一匹が持っていた魔剣。

「あの魔剣は……！」

姉を殺したゴブリンが持っていた魔剣だ！

五年前に見たのはホブゴブリン。今回はダンピール。明らかに別種のゴブリンだが、彼は確信していた。

奴はあの時のゴブリンに間違いないと。

「見つけた、見つけたぞ……！」

姉の仇。故郷を滅ぼした元凶。彼から全てを奪った怨敵。

いまずぐにでも奴に復讐したい。だが、彼は復讐心に腕の中の少女を忘れるほど荒ぶっていない。

いまはこの子を助けるのが優先。自分が守れなかった村の唯一の生き残り。

この子を見捨てるのは、村を滅ぼしたゴブリンと同類。それだけは許容できない。

彼は重傷の身体を引きずりながら、街を目指した。

吸血小鬼<sup>ダ  
ン  
ビ  
ール</sup>。決して忘れぬようにその名を胸に刻んで。

## 二ゴブ

### ゴ布林2

ゴ布林スレイヤーを殺し損ねた俺は人目を避けるように行動した。

仕留め損ねたせいで顔を知られた。ないとは思うが討伐依頼など出てはたまらない。だから、ほとぼりが冷めるまで潜伏することにした。

幸い、潜伏場所に持つてこいの場所を俺は知っている。原作7巻だったかな？

妖精弓手の故郷である密林。ジャンブルその密林の奥に『モケール・ムベンベ』川を堰き止めるものと呼ばれる恐竜がいる。

森人はモケール・ムベンベを尊い生き物とし、傷付けてはならない存在としている。ゆえに恐竜が住む密林の奥にエルフが立ち入ることはない。

だが、俺はゴ布林。そんなことは関係ない。密林に入り、川上を目指し、モケール・ムベンベの領域に侵入した。

そこには『川を堰き止めるもの』の由来となった神代に築かれた堤防がある。何のためには作られたのか知らないがいまや小鬼の城塞だ。

ゴ布林シャーマンが率いる群れが住み着いていたが圧倒的力の差を思い知らせて、

奪い取った。そのまま群れは俺の配下になった。

安全な潜伏先を見つけた俺は、次はモケール・ムベンベに手を出した。

原作では一体だったモケール・ムベンベだが、探してみればそれなりの数が生息していた。

只人ではレルニアン・ヒュドラと呼ばれ、ヒュドラの名前の通り、首が多い。だが、生まれたときから首が多いわけではなく、歳をとるほど首が増えていく。つまり、一番首が多い個体が最も長生きしている。

やっぱり、飼うならヒュドラと呼べる首が多い個体にしたかったので、最も首が多いモケール・ムベンベを捕獲した。

群を抜いて巨大な背丈は百約三十メートルフィートはあろうか。山が動いているかと錯覚するほど。その首の数はなんと九本。まさにヒュドラと呼ぶに相応しい姿だ。

その巨体と複数の首による攻撃は厄介だったが、勝てない相手ではなかった。屈服させて飼い慣らした。

あと九本首は群れの長だったようで、ヒュドラの群れが丸々配下に加わったのが嬉しい誤算だ。ゴブリンを乗せて小鬼竜騎兵ゴブリンドラグーンを作るのも面白いかもしれない。

しかし、モケール・ムベンベは一本首の若い個体でも千年以上生きていらしい。この九本首は何歳なんだ？

城塞を手に入れ、モケーレ・ムベンベを配下に入れ、密林の奥地を支配した。

目論見通りにことが進み、俺はほくそ笑む。

そうしてまた調子に乗ったのがいけない。とんでもない怪物が現れた。あれか？

俺が調子に乗ると不運が襲ってくるのだろうか？ そんなに神様は俺が嫌いか？ 安心しろ俺も神様は大嫌いだ。とりあえず一言。

「神は死ぬ！」

「神は死ぬ！」

現実逃避はやめよう。今回の敵はドラゴン。それも野山を這いまわる下級の竜とは違う。恐ろしく力猛き、まことの竜。

その中でも伝説に語られる、神代を生き、神々さえ恐れた悪しき竜だ。

名前を呼ぶだけで呪われるほど伝説の怪物が、なぜ俺の前に現れたかという、持つてる魔剣が原因だった。

悪しき竜曰く、銘を竜殺しの魔剣。

神代に作られた竜を殺せる力を秘めた勇者の聖剣に並び立つ、伝説の魔剣らしい。

無駄に装飾が凝ってるし、五年以上使って刃毀れもなく、切れ味も落ちず、俺の怪力で振り回しても折れないから、すごい魔剣だとは思ってたが、まさか神代の遺物とは。

どうもここは悪しき竜の住処らしく、竜殺しの魔剣に傷付けられ、千年の眠りについていたらしい。

そこには竜殺しの魔剣が近付いてきたから、目覚め、現代の所有者である俺に恨みを晴らそうと思ったようだ。

……完全な逆恨みだな。竜は賢いと聞いてたけど思考回路がゴブリン並だぞ。

話を通じる相手じゃないのはわかった。生き残るには悪しき竜を倒すしかない。

流石は神々さえ恐れた伝説の竜。その肉体は全てが凶器。地形を一撃で変える筋力があり、十日十夜暴れ続ける体力があり、様々な呪文を使える知力があり、何十回と呪文を使える魔力がある。

何もかもが圧倒的で死ぬかと思った。まともに戦っても勝てないので、なんでもした。

眼球に魔剣を刺したり、鼻に汚物を突っ込んだり、口に毒薬を放り込んだり、耳に燃える水ガソリンを流し込んだ。不意打ち、騙し討ち、最後は魔剣に宿る竜殺しの呪いで生命力を削り尽くした。

で、悪しき竜の死骸を見て思った。確か前世の神話で竜の血を浴びたり、心臓を食べべて強くなったドラゴンスレイヤーがいたな、と。

吸血鬼に噛まれたら吸血鬼化するという伝承が本当だったように、同じ方法でドラゴンスレイヤーのようになれるのでは？　と思い、試した。

結果は大成功。



竜の血を浴びたことで、身体が鋼より硬く、いかなる攻撃も受けつけない不死身の肉体と、無限に魔力を生み出す竜の心臓を得た。

竜の心臓を食べたことで、神代の知識さえ記憶している、賢者を超える竜の叡智と、身体が竜と同種に改造された竜としての無敵の肉体を得た。

吸血鬼に噛まれ吸血鬼の力を得た吸血小鬼<sup>ダンヒール</sup>であり、竜を殺して竜の力を得た竜殺し<sup>ドラゴンスレイヤー</sup>に俺はなった。

あと悪しき竜が溜め込んでいた金銀財宝、魔法の品、伝説の武具なども手に入れた。

防具を失っていた俺はその中でも最も良さそうな、鋼より硬く羽のように軽い真銀<sup>ミスリル</sup>で作られ、魔法の守りまで施された鎧を装備することにした。



竜殺しを成してしばらく。俺は新たな取り組みをしていた。

その名も『ゴブリン繁栄計画』。

最弱の怪物であるゴブリン。だが、中には先祖返りしたホブゴブリン。呪文を使えるゴブリンシャーマン。狼に騎乗するゴブリンライダー。熟練の冒険者さえ圧倒するゴブリンチャンピオンなど強い亜種は数多く存在する。

その亜種を意図的に生み出せれば、最底辺の生活をするゴブリンがより繁栄するのはないかという計画だ。

まあ、大それたことを言ったが、ぶつちやけ暇だから育成ゲーム感覚で色々試していただけだ。

呪文を教えればゴブリンは全てゴブリンシャーマンになるのか。

痩せつぽちなゴブリンの栄養状態が改善すればホブゴブリンのような屈強な肉体になるのか。

ゴブリンライダーを熟練させれば竜さえ乗りこなすゴブリンドラグーンになれるか。

ゴブリンチャンピオンを鍛えれば更に強い個体になるのか。

それなりに成果は出て、新しい亜種も生まれた。その中でもずば抜けて進化した個体が六体があり、そのゴブリン達をヘキサグラムと呼称した。

他にも母体の種族や栄養状態、戦士なのか魔術遣いなのかで生まれてくるゴブリンにも変化があるのかなど調べた。え、外道？ それでも元人間か？ そんなものはゴブリンになったときに捨てた。

わかったのはゴブリンの遺伝子強過ぎることくらいだった。小さな圃人レイアだろうが人とはかけ離れた蜥蜴人リザードマンだろうが、小柄で非力で馬鹿な小鬼しか生まれなかった。ここまで違いがないとゴブリンの遺伝子が母体の遺伝子を塗り潰しているのか？

あと数が増えすぎた。何年も実験していたから堤防がゴブリンだらけになった。百匹からは数えていない。

だから、各地に旅立たせた。厄介払いとも言う。

ついでに吸血鬼として使える力に蝙蝠を使い魔にすることができるので、それで監視した。住む環境でどう適応するか観察してみよう。

で、しばらく放置していると密林近くの遺跡で異変が起きた。

ゴブリン共が襲われた。だが、冒険者ではない。巨大な怪物で、ゴブリン共を従え、砦に陣取ってしまった。更に放ったゴブリン共を掻き集め始めた。

せっかく各地に放ったゴブリンを一纏めにされては堪らないので砦に向い、文句を言った。

そこにいたのは人喰い鬼<sup>オ</sup>だ<sup>ガ</sup>った。銀等級の冒険者も恐れる強力な怪物。

だが、待てよ。密林に近い古い砦。そこに蔓延るゴブリン集団。親玉のオーガ。……これ、原作1巻であつたよな？

「毛色の変わつたゴブリンだが、ゴブリン風情が我に挑むとは命知らずな」

「命知らずね……」

ここで彼我の差を把握してみよう。

体格。只人と変わらない俺よりオーガの方が圧倒的に大きい。

膂力。オーガは小鬼英雄に勝るとも劣らないが、俺は竜と吸血鬼の力によって巨人を遙かに超える。

防御力。オーガの皮膚は岩のように硬いが、俺は身体は鋼より硬い。

呪文。オーガは熟練の魔術遣いを上回るが、俺は賢者を超える竜の魔力と知力があ  
る。

治癒力。眼球を潰されたくらいなら傷が癒えるオーガと、脳と心臓以外ならどんな瀕  
死の傷も癒える俺。

武器。オーガはただでかい戦鎚で、俺は伝説の魔剣。

結果は……。

「……………も、申し訳ありません……………!!?? 許してください……………!!??」  
「まあ、ことうなるよな」

無傷の俺と倒れ伏し無様に命乞いをするオーガが出来上がった。普通のゴブリンな  
ら、このまま残虐性を発揮して鬪り殺すだろうが、俺は冷静に考える。

オーガは魔神王の配下。殺せば魔神王まで敵に回す。あの悪しき竜と同等の怪物な  
どと戦うなど真つ平だ。どうしようかと悩んでいたら、協力を要請された。

俺は魔神将に匹敵、いや上回る力を持つ強大な怪物だから、秩序の軍勢を滅ぼすのに  
助力してほしいと。

流石に人類全てを手に回すは面倒くさいし、目の敵にされるので嫌だった。かといって魔神王を敵に回すのも嫌だ。

仕方なく俺はこのまま砦のゴ布林共はオーガに預け、俺は森人の里に攻め入ること  
で手を打った。

オーガが率いるゴ布林軍が背後から秩序の軍勢を襲い、俺は秩序の軍勢の一角である森人の里を潰す。それで納得させた。

まあ、個人的には目立ちたくないから地理的にも離れた森人の里なら塵殺してしまえば正体がばれず、混沌の軍勢がやったと思われる打算がある。

あとゴ布林スレイヤーがいずれこの砦を訪れるから、オーガをぶつけて原作との差異を知りたい。イレギュラーが介入して原作乖離なんてよくある話だからな。

できれば二度と会いたくないが、俺との遭遇がどんな影響を与えているか知りたい。

オーガと遭遇して、そう時を立たず、ゴ布林スレイヤーの一派パーティが砦にやってきた。

基本的には原作通りだった。ゴ布林は皆殺しで、オーガは真つ二つにされた。

……見る限り、ゴ布林スレイヤーは原作より強くなってるか？ 戦士としての技量が上がった？

上手いければここでゴ布林スレイヤーを始末できるかと思って、ホブゴ布林やゴ

プリンシャーマンを増援として送ったのだが。

ホブゴブリンの首を次々刎ねる技量と、ゴ布林シャーマンを何匹も串刺しにする膂力。原作では鋼鉄等級の冒険者にも実力では劣ると自分で言っていたが、俺が見た感じは銅等級くらいありそうだな。

あと変なのはゴ布林スレイヤーが持つ剣……あれ、真銀ミスリルだよな。それも中途半端な長さだから特注品だ。武器なんて使い捨てにする奴がなんであんな高いものを。ゴ布林相手には必要ないだろう。

しかし、えげつない。串焼きのようにゴ布林を何体も串刺しにして燃やしやがった。容赦のなさは相変わらず……て、あれ？

(見えなくなつた。使い魔との繋がりが切れたのか……流れ矢でも当たつたか?)

まあ、見たいものは見れたから別にいいか。使い魔はいくらでも代わりがいる。

そう楽観的に考えた俺は森人の里侵攻の準備に入った。

「六小鬼ヘキサグラムを招集しろ。無駄に長生きしている森人エルフ共に終止符をくれてやる」



「あのゴ布林スレイヤーさん。どうしたんですか？」

戦いも終わったのに虚空に短剣を投擲したゴブリンスレイヤーに女神官が声をかける。

「蝙蝠だ」

「蝙蝠？」

見れば短剣で刺された蝙蝠が落ちてきた。怪物の類でもない、普通の蝙蝠だ。こんな地下遺跡なら居ても珍しくない。妖精弓手が意味がわからず質問した。

「なんで、蝙蝠なんて刺したのよ。怪物でもないのに」

「吸血鬼は蝙蝠を使い魔とし、遠方を見通せると聞いた」

「……なんでゴブリン退治で吸血鬼が出てくるわけ？」

ますます意味がわからない。だが、言葉足らずな男はそれ以上語らない。

「しかし、えげつないの、かみきり丸。油を塗った白木の杭で串刺しにして内側から燃やすなど」

「そうよ！ 刺せばそれで十分じゃない！ ゴブリンって焼けると酷い臭いがするなんて知りたくなかったわ!!？」

鉄人道士が声をかけ、妖精弓手が騒ぐ。

「あるゴブリン対策に持っているものだ。刺すだけで死ぬとは思えないし燃やしても平然としているかもしれない」

「……オルクボルグ、何を殺す気よ」

「ゴブリンだ」

「そんなゴブリンはいないわよ！」

噛み付く妖精弓手と気にも留めないゴブリンスレイヤー。これはいけないと蜥蜴僧侶が話題を変える。

「いや、それにしても見事な戦働きでしたな。小鬼殺し殿の歌に偽りはなかった」

小鬼殺しの鋭い致命クリティカルヒットの一撃が、小鬼王の首を宙に討つ。

おお、見るが良い。青に燃ゆるその刃。

まことの銀にて鍛えられ、決して主を裏切らぬ。

かくて小鬼王の野望も終には潰え。

救われし美姫は、勇者の腕に身を寄せる。

しかれど、彼こそは小鬼殺し。

彷徨を誓いし身、傍に侍う事は許されぬ。

伸ばす姫の手は空を掴み、勇者は振り返ることなく立ち出る。

屈強なホブゴブリンの首を容易く刎ねる姿は歌に語られる辺境の勇士そのものだった。

ゴブリンスレイヤーとしてはダンピールの出鱈目な臂力と脚力に少しでも対抗する



ために鍛えたただけだ。

「どこがよ。歌と一緒になのはまことミスリルの銀の剣だけでしょ。それに真銀ミスリルもそれだけ汚いと台無しじゃない」

「金臭さを消すのに必要な処置だ。こんなゴブリンに奪われたら厄介なものは俺も持ちたくない。吸血鬼が銀の武器に弱いから、使っているだけだ」

「だから、何で吸血鬼なの！ オルクボルグでしょよ！」

「俺はゴブリンスレイヤーだ」

## 三ゴブ

森人<sup>エルフ</sup>の里。神代の頃より育ち続けてた緑の迷宮と呼べる密林の中にあり、妖精弓手の故郷だ。

森人は、森と共に生まれ、森と共に在る。ゆえに森は彼らに力を貸し、彼らを助ける。この広大な密林全てが森人の味方だ。

つまり、密林は森人の腹の中も同然。密林で戦うことに長けた奴らに密林で挑んでも勝ち目はない。ならばどうするか？

簡単だ。相手の土俵で戦つてゐる必要はない。盤ごとびつくら返せば良い。

「《誇り高き吸血王<sup>ノスフェラトウ</sup>よ、我が領域に光を許さず、闇に鎖せ》」

—— 《夜国<sup>フラキア</sup>》。

《夜国》。広範囲を暗黒で支配し、視界を奪う奇跡。夜目が効く森人であろうとこの奇跡の前では光を失い、見透すことはできない。その範囲は森人の里全域に及ぶ。

ダンピールは続けて奇跡を使う。

「《大いなる真祖<sup>ヴラド</sup>よ、我が敵を肅清せよ》」

《極刑》……それも精神力でもって拡大した、巨樹よりも天高くそびえる巨大杭。それが

森人の里を囲むように展開された。さながら里を守る城壁のように。だが実際は誰も逃さない監獄だ。

《夜国》で視界を奪い、《極刑》で逃げ場を奪う。誰一人逃さず、塵殺するために彼は出し惜しみをしない。

そして地の利を奪う最後の策、火攻めだ。密林が邪魔だ。なら、燃やしてしまえ。単純ながら効果は絶大だ。何も見えず、里から逃げることもできない森人は状況を把握することもできず、次々と焼け死んでいく。

無論、森人にとって火は天敵。精霊に嘆願し、火勢を衰えさせる。里に火除の結界を張り巡らせる。様々な対策が成され、こうも容易く火攻めができるはずがない。

それを可能としていたのがいつの間にか降っていた雨だ。ただの水ではない。黒色の、ねつとりとした液体が降り注いでいた。

燃える水だ。ダンピールが従えた巨大蝙蝠ジャイアントバッドが上空からガソリンを森人の里に撒き散らしていた。

そこら中に撒かれたガソリンによって精霊の力も火除の結界も物ともせず火勢が増していく。

それを阻止しようと、あるいは仲間を逃がそうと暗黒の呪縛から抜け出した森人の猛者が行動する。そこに立ちはだかるのは異常なゴブリン達。

一体で戦場の行末を左右しかねない、小鬼チャンピオン英雄さえ比較にならない強大なゴブリン。ゴブリンとは思えない知性を宿す眼をしていれば、大鎧を着込んで盾と剣を持つゴブリンもいた。

巨樹よりも天高くそびえる巨体がいれば、もはやゴブリンと呼べない異形まで。彼らこそこそ六小鬼ヘキサグラム。ダンピールの最高戦力。その実力は金等級と渡り合えるほどだ。

森人は何千年と生きる熟練者だ。ただのゴブリンでは幾ら数がいっても相手の土俵では勝てない。

ゆえに少数精鋭。最強の六匹に森人は駆逐されていった。



「《アルマ武器……インフラマ火ラエ……オツ付フエーロ与》！」  
 《炎エンチャント・ファイヤ 与》。炎が魔剣に宿り、斬ったものは燃やし尽くされる。

俺は火回りが早くなるように《火球》などなるべく炎の呪文を使用して暴れ回った。見かける森人は老若男女関係ない、生きている者には等しく死を与えた。

「貴様あああああああつっ!!？」

怒りの咆哮。迫る黒曜石の刃。俺は躲し、反撃の魔剣を繰り出すが、受け流された。石器の大刀の持ち主と相對する。

若く美しい森人の戦士だ。革の鎧を身に纏い、真銀ミスリルで作られた兜を付けている。

(あの兜……確か妖精弓手の従兄だったか?)

原作にも登場した、輝ける兜の森人。次世代の長になることが決まっている実力者。更に数千年もの練磨を重ねた技量は侮れない。経験には圧倒的な差がある。

だが、俺は負けるとは思っていないなかった。確かに経験では敵わないが、経験ではどうにもできない絶対的な力の差がある俺と輝ける兜の森人にはある。

「お前は……何だ?」

「ゴブリンだよ」

一方、輝ける兜の森人は困惑した。里を襲った敵を討とうと思えば、相手はあまりに異質。

真銀ミスリルの鎧を身に纏い、手にする重厚な剣は一目で尋常ならざる業物とわかる。

黄色の瞳に緑色の肌をした只人に似た見たこともない種族だが、まるで竜と相對したよう存在感がある。

数千年を生きる彼でも見たことない未知の怪物、それが自ら最弱の怪物と名乗ったのだ。

輝ける兜の森人の疑問を解消する間もなく、戦いは始まった。だが、戦いは俺が圧倒していた。

経験や剣術は長命種である森人が上だが、それでは覆しようのない絶望的な脅力が、なにより鋼より硬い身体には黒曜石の刃が通じない。

更に俺はこれ見よがしに木々を斬りつけ、燃やし、森人を挑発する。

決着は早かった。石器の大刀を砕き、輝ける兜の森人を追い詰める。仕留めようとした時、超速の矢が飛び、俺の眼球を捉えた。

だが、俺は不死身の肉体を持つドラゴンスレイヤー。眼球さえ硬く、矢は弾かれる。

俺は邪魔者を睨む。大弓を構え、銀河のような髪をなびかせ、見据える両目は金色。

豊富な胸としなやかな肢体に、森人より長い耳は上の上の森人の証。<sup>ハイエルフ</sup>妖精の末裔である森の姫がいた。……あの女は、妖精弓手の姉。それから輝ける兜の森人の結婚相手だったか？

「な、何故ここに!?? 逃げろと言ったはずだ!」

「貴方を置いてはいけないわ」

「戦いの最中に見せつけんなよ」

何、ラブロマンスしてんの? だが、相手がどんな関係かなんて知ったことではない。

元より森人は塵殺する。むしろ、あちらから来てくれて手間が省ける。

森姫と輝ける兜の森人の連携は見事だった。声を掛け合うこともなく助け合い、互いの力を限界まで引き出していった。これが愛の力か、なんて思った。……まあ、俺に対しては悪足掻きだったけど。

そう時間もかからず、二人は倒れ伏した。

「終わりだな。死ぬ前に最後のお別れぐらいはさせてやるよ」

「別れ？ 違うな、我らは自然に還るのだ。この身が朽ち果てようと決して引き裂かれることはない」

「そうよ。自然に還って私たちは一つになるの。永遠にこの人と共に在り続けるわ」  
「還る森は燃えているが？」

……いらつく。ゴブリンになってまともな恋愛もできない俺に当てつけるように、砂糖を吐きそうな甘い台詞をペラペラと。

さっさと始末しようかと思っただけどやめた。二人の仲が引き裂かれないっていうなら、試してやる。吸血鬼になって同じことが言えるか？

俺は森姫の首に牙を突き立て、吸血鬼化させた。森姫……改めて妖精吸血鬼の豹変は凄まじかった。いや、正直吸血鬼化がここまで性格に影響を及ぼすとは思わなかった。

愛した男を自ら殺すくらいには精神性が邪悪になっている。吸血鬼化すると精神も汚染されるのか？ 俺は性格なんて変わらなかつたが……ゴブリンだから？

ちよつとラブラブなのがむかつてやったが、思ったより酷いことになった。輝ける兜の森人が絶望に染まった顔で死んでる。

「ご主人様、次は誰を殺しましょうか？」

「ああ、うん。……ちなみに同胞を殺すのに抵抗とかは？」

「私はご主人様の眷属、あんな森の虫共と一緒にしないでください。害虫駆除になんの抵抗があるか？」

妖精吸血鬼は森姫と同一人物とは思わないことにした。別人と考えた方が混乱しなくて済む。

まあ、そろそろだ。もう時間稼ぎの必要はない。六小鬼も撤退した頃だ。俺たちも帰ろう。

背囊から魔法の巻物を取り出す。込められた魔法は《転移》。竜の知識を得たダンピールは失われた《転移》の呪文、そしてスクロールの製法さえ知り得る。スクロールにしたのは他の六小鬼にも持たせるためだ。ダンピールと妖精吸血鬼の姿は《転移》によつて里から消えた。

そして森人の里に終焉が訪れる。

《極刑》による閉鎖空間。里を呑み込む炎。この状況こそダンピールの最大の仕掛けだ。炎の精が風の精を消し去り、踊り手のいない里内に風の精が舞い込む。しかし、火の



精に熱せられ、風の精は上空に追いやられる。舞い上がる風の精と混ざり合い、火の精はより強く、より熱くなる。

前世において『火炎旋風』と呼ばれる現象だ。

森人の里を炎の竜巻が包み込む。竜巻内は千度を超える高温にして秒速百メートルに達する旋風の地獄だ。これに耐えられる森人はおらず、例え耐えようと呼吸ができず窒息する。誰も助からない。

今宵。神代より続いた森人の里は跡形もなく焼け落ちた。生き残りは誰もおらず、この大事件がゴブリンの手によるものだと知られることはなかった。



森人の里を滅ぼし、約束は果たした。これで魔神王から何か言うことはないだろう。世界を滅ぼすなり、勇者と殺し合うなり、好きにしてくれと他人事だった。なのに……。……なんで魔神王に呼び出されてるんだ？

いや、理由はわかる。手柄を立てたので褒美をくれるらしいから、取りに来て話だ。

ただ相手は魔神王だしな。素直に喜べない。というかもう混沌と秩序の戦争なんて

関わりたくない。

でも、行かなければならない。例えるなら、会社の上司に飲み会やるから来てくれと言われて断れない平社員の気分だ。

まあ、敵勢力の一角を滅ぼした立役者を殺すなんてことはないだろう。気楽に行こう。

「——どうせ、こんなことだと思つたよ!!?」

「夜明けの、一撃イツ!!?」

太陽の爆発!

俺は死に物狂いで避ける。反撃の呪文は軽々と防がれ、避けられた。

更に魔神王のとんでもない威力の術が俺もろとも勇者を滅ぼそうとする。

魔神王と勇者。この世の頂上決戦に俺は巻き込まれていた。

魔神王が俺を呼び出したのは勇者の力を削る捨て駒にするためだった。勇者も俺を見るなり斬りかかってくる。

故郷の仇とか、お兄ちゃんの敵とか、喚いていた。お前の故郷なんて知らないし、勇者に兄がいたことも初耳なんですが?

俺が一番強い、とか自惚れたことないのに世界最強クラスの決戦なんか巻き込まないでほしい。

勇者の聖剣にバターののように斬られ、魔神王の呪文にチーズのように溶かされた。不  
死身の肉体とはなんだったと言いたい。

幸い、魔神王と勇者の力が拮抗したおかげで逃げられた。勇者の仲間が邪魔しよう  
としたが、魔神王クラスでなければ怖くない。斬り合いでは剣聖を圧倒する臂力を持つ  
の剣で斬り伏せ、知恵比べでは賢者を超える竜の叡智を持つ俺の術が勝った。

巻き込まれた腹いせに魔神王の宝物庫から呪具を頂き、勇者の仲間から剣聖を吸血鬼  
にしてやった。

まず呪具はよくわからない。とりあえず強力そうなのを掻っ払ってきたが、この奇怪  
な腕の彫像は何に使うの？

次に剣聖は吸血鬼になって性格ががらりと変わり、俺の眷属になったことに不満はな  
いらしい。

曰く、私より強い男のお嫁さんになりたいが、見つからず行き遅れになると不安だっ  
たらしい。

そしたら、妖精吸血鬼と剣聖吸血鬼が喧嘩を始めた。どちらが第一夫人だとかで。  
え、結婚は確定事項？ 怪物にそんな風習は……なんでもないです。睨まないで。

ちなみに賢者は吹き飛んだからどうなったかわからない。



魔神王が討伐され、勇者は史上十人目の白金等級冒険者に認定された。

都では盛大に祝典が開かれ、辺境の街でも祭りが催された。

だが、ゴブリンスレイヤーには関係ないことだ。彼は変わらずゴブリン退治をしている。

今日もゴブリン退治の依頼を受けようとしていた。

「到着うー！」

ギルドの扉が勢いよく開かれ、活発な声が響く。

現れたのは年若い少女だった。駆け出し冒険者にも見える年頃だが、そうでないの是一目でわかる。

身に纏った鎧には魔術の守りが、腰に帯びた重厚な剣は尋常ならざる業物だ。何より、首から下げた認識票は——白金。

いま話題の勇者の登場に、ギルド中がざわつく。

「わわ！ すごくですよ、ゴブリンスレイヤーさん！ 勇者様ですよ！」  
「そうか」

ただ一人、ゴブリンスレイヤーだけはゴブリン退治の依頼を物色して見向きもしな

い。興奮する女神官にも相変わらぬ対応。このまま何事もなかったように彼はゴブリン退治に赴くのだろう。……だが、今回は違った。

「あつ、いたあー！」

勇者はゴブリンスレイヤーを見つけると目にも留まらぬ速さで彼我の距離を走破し……。

「お兄ちゃんー！ 会いたかったよおーっ！」

ゴブリンスレイヤーに抱きついた。勇者の発言にギルドの時間が止まった。そして彼女の言葉を理解し、絶叫が上がった。

「お兄ちゃん!? オルクボルグが!?」

「これは驚きですな。小鬼殺し殿の妹が勇者とは」

「しかし、かみきり丸とは似ても似つかん性格しとるの」

妖精弓手、蜥蜴僧侶、鉄人道士が感想をもらす。女神官が驚きながらゴブリンスレイヤーに声をかける。

「ご家族なら言つてくださいよ。びっくりしました」

「違う」

「そうだよ。僕とお兄ちゃんは家族じゃないよ。牧場で一緒に暮らしてたから、そう呼んでるだけ」

ゴ布林スレイヤーの否定を勇者が引き継いで説明する。

「では、牧場の方々の？」

「ううん。僕はお兄ちゃんに助けてもらったんだ。帰る場所もなかった僕をお兄ちゃんが頼み込んで牧場に置いてくれたんだよ！」

「それって……」

それだけで冒険者ならば察せる。ゴ布林スレイヤーが受ける依頼はゴ布林退治だけ。そして帰る場所を失ったということは彼女の故郷は、ゴ布林に滅ぼされたということだ。

その時のことを思い出したのか寂しそうな顔をした勇者がゴ布林スレイヤーに話しかける。

「お兄ちゃん」

「なんだ」

「……あいつを見つけた」

それだけでゴ布林スレイヤーが顕著に反応した。勇者が誰のことを言っているのか理解したのだ。

「どこだ」

「魔神王と一緒にいた。……でも、逃げられちゃった。僕の仲間もあいつに……」

「……そうか」

「また……また守れなかった！ 皆の、故郷のみ仇を打つどころか、また仲間を失った！  
もう失わないように強くなったのに！」

ゴブリンスレイヤーに縋り付き、涙を流す勇者。剣聖を攫われ、賢者はいつ目覚めるかわからない。自分の胸の内を吐き出す。ゴブリンスレイヤーの前だけ勇者はただの女の子に戻れた。

ゴブリンスレイヤーはただ黙って彼女の慟哭を訊いていた。

## 四ゴブ

### ゴブリン 4

混沌と秩序の戦争が魔神王の敗北で終わってしばらく、俺は辺境の街近くにいた。

何故、あれだけ避けていた人里に近づいたかというと、危機感を抱いたからだ。

先日の勇者との邂逅。この世には俺が勝てない強者がいることを理解した。そして思った。もしゴブリンスレイヤーが勇者くらい強くなったら？

可能性はゼロとは言えない。現にゴブリンスレイヤーは原作より明らかに強くなっていた。このまま強くなり続けられればいずれ勇者に並ぶほどになるのでは？

白金等級のゴブリン退治の専門家。笑い話にもならない。

だから、まだ弱い内にゴブリンスレイヤーを始末する。それに都合良い事件もこれから起こる。

いま辺境には小鬼王ゴブリンロードが出現し、ゴブリン軍がゴブリンスレイヤーの住む牧場を襲おうとしている。

原作では迎え撃った冒険者によってゴブリン軍は壊滅。ゴブリンロードもゴブリンスレイヤーに討たれた。



その戦争に介入する。場所も、状況も、敵戦力も把握できる今回は仕掛けるには持つてこいだ。

まずゴ布林スレイヤーを殺す邪魔が入らないように原作よりゴ布林軍を増やした。具体的には十倍の千匹に達する大軍団。これぞ数の暴力。

銀等級冒険者に対抗するために六小鬼ヘキサグラムも連れてきた。本当は全員連れてきたかったが、四匹だけにした。残る二匹は理性もなく、暴れ出したら俺でも手がつけられない。集団戦なんてやれば敵味方関係なく皆殺しにしてしまう。だから、留守番だ。

あと妖精吸血鬼と剣聖吸血鬼も留守番。今回の戦争はあくまでゴ布林による襲撃だ。ゴ布林以外が関わってるのを見られたくない。

何が起きててもゴ布林というだけで国が動かないのは楽でいい。

「GRRARRARRA!!? GRRARRARRARRA!!?」

ゴ布林ロードの号令。いよいよ戦争が始まる。ちなみに指揮はロードに任せた。軍団の九割と主戦力は俺の配下だが、牧場襲撃は囲みたいなものだからロードの好きにさせることにした。

それでもこの軍団を集めたのは自分の力だと信じて疑わないロードは、どれだけ賢くなるうとゴ布林だと思った。

「さて、ゴ布林スレイヤーは原作通りに動くか？ お手並み拝見だ」

圧倒的な数のゴブリンに、死傷者は出たものの冒険者は有利に戦いを進めた。

ゴ布林ロードの戦術は完璧に見破られ、大量導入したホブゴ布林も槍使いを始めとした熟練の冒険者に敗れ、切り札である小鬼英雄チャンピオンも重戦士と女騎士に倒された。

ちなみに大勢の冒険者を見た瞬間、ロードは逃げ出した。まだ六小鬼ヘキサグラムも出していないのにあの潔さは素直に感心した。

「まあ、いいさ。これでゴ布林スレイヤーは小鬼王ロードと相對する。お前たちは牧場の冒険者を蹴散らせ。こっちに近づけさせるなよ」

俺の言葉に戦場へ向かう六小鬼ヘキサグラム。それを見届け、俺はこっそりロードを追った。

……しかし、あの戦場で暴れ回る黒髪の少女って……いや、まさかな。雑魚怪物であるゴ布林退治するほど白金等級も暇じゃないだろう。



「また私のおかげで命を拾ったな」

「ああ、助かった」

小鬼英雄を倒した重戦士と女騎士。彼らは残った敵の元へ向かおうとし、女騎士が気付いた。

「つ、伏せろ！」

「!?」

女騎士が大盾を構えて重戦士を庇う。直後、降り注ぐ毒矢の雨。あと少し遅ければハリネズミと化していただろう。

そしてぞろぞろと草原から現れたゴブリンの増援。その数は十、二十、三十と増えていく。

「新手！ まだこれだけの数が！」

女騎士は驚愕する。開戦時から討ち取った数は既に五百を超えていたゴブリン軍にまだ予備兵力がいたのだ。

「それだけじゃねえ。あの一等デカイのはヤバイぜ」

ゴブリン軍を率いて現れた先程のゴブリンチャンピオンにも劣らない巨体。ならばこのゴブリンもゴブリンチャンピオンなのかと問えば違う。

身に纏うは全身鎧。それも巨体を余すことなく守る重厚な金属鎧だ。武器は背丈もある大盾と重戦士のだんびら以上の大剣。それも揺らめく燐光は魔力の証、魔剣だ。武器も鎧も業物、これだけ充実した装備を持つゴブリンなど聞いたことがない。

更に隙について奇襲する狡猾さといまも油断なく警戒する冷静さ。知性も非常に高い。拳句に……。

「IRAGARARARARA!!?」

「馬鹿な!」

「こいつ!?」

大剣から放たれた《聖ホーリースマイト 撃》。二人は回避しながら、その正体を悟る。奇跡を授かり、敵を討ち滅ぼしに現れた神の使徒。

「ゴブリンゴブリン、聖騎士だと……!」

——否。彼は奇跡を授かっただけの小鬼聖騎士とは格が違う。

彼は元小鬼英雄で、自分が一番強いと信じて疑わず、事実彼は無敗だった。それを完膚なきまでに打ち砕いたのが吸血小鬼ダンピールだ。

ダンピールに敗れ、軍門に下った彼はそれでも自分が一番強いという自負を捨てられなかった。彼はどうかダンピールより強くなりたいと悩み、悩みに悩んで神に奇跡を授かった。

覚知神。ゴブリンにさえ邪悪な知恵を与える邪神から得た奇跡と優れた頭脳によって剣術を身につけた。その技量は熟練の冒険者である女騎士にも劣らず、膂力と体格が勝る分彼の方が強い。

彼は強く、賢い。最高戦力である六小鬼ヘキサグラムに名を連ね、軍団さえ指揮する頭脳がある。

ゆえに彼はこう呼ばれる。

へキサグラム  
小鬼將軍。

「GROAAAAB!!?」

小鬼英雄と小鬼聖騎士。二種の力を併せ持つ小鬼將軍がゴ布林軍を率いて冒険者に襲い掛かる。



「ゴブリンの増援だ！ 百、いや二百はいるぞ！」

「ヤバイぞ！ 助けに——」

冒険者が言えたのはここまでだった。なぜなら振り抜かれた巨大な戦鎚を受けて、身体を爆散されたからだ。

その冒険者は銅等級。実力と信用を兼ね備えた銀等級に次ぐ力があつた。そんな冒険者が反応もできない速度で攻撃が繰り返された。

銅等級冒険者を瞬殺したのは見上げるほどの巨大なゴ布林だった。オーガさえ超える巨体はまさに巨人。圧倒的な脅力はその手の戦鎚で全てを粉碎するだろう。

へキサグラム  
ゴブリンギガンテス  
六小鬼の一角、小鬼巨人。

「こりやまた大物だな」

「気を、つけて。強い、わよ?」

「はっ、大物喰らいをしなけりや、冒険者の名折れだ!」

『辺境最強』と名高い槍使いが攻めかかり、小鬼巨人が迎え撃つ。戦鎚がクレーターを作り、お返しとばかりに必殺の槍が振るわれる。

「なっ!?」

だが、小鬼巨人は宙返りして避けた。巨体に見合わぬ身軽さだ。何より攻撃されてから回避までの判断力が凄まじく速い。戦い慣れている。

小鬼巨人はダンピールの実験の過程で生まれた上位種だ。ホブゴブリンは経験を積みめばゴブリンチャンピオンに至る。ならばゴブリンチャンピオンに更に経験を積みませればどうなるか?

そう考えた吸血小鬼は十匹以上の小鬼英雄を集めて、最後の一匹になるまで殺し合いをさせた。

同じ壺に様々な虫を入れ、共喰いをさせる『蠱毒の壺』をゴブリンで実行したのだ。

結果、最後まで生き残ったのが巨人と見紛う巨体まで成長したゴブリンギガンテスである。

圧倒的な膂力に、巨体に見合わぬ素早さを兼ね備え、膨大な戦闘経験によつて戦士としての技量は極めて高い。純粋な白兵戦はヘキサグラム六小鬼最強だ。

「なるほどな。一筋縄じゃいかねえか。悪いが付与エンチャントをくれ」  
 「はい、はい、い」

だが、それで臆する銀等級ではない。魔女によって槍使いの武器が呪文で強化される。辺境最強と六小鬼最強が激突した。



「西から二百、反対からも二百！ 挟撃する気よ!!？」

「こりゃ、ちとまずくないか!？」

「確かに！ 小鬼共にまだこれほどの手勢が残っているとは！」

視力に優れた妖精弓手からの報告に、鉄人道士と蜥蜴僧侶は焦る。予想を遥かに上回るゴブリンの大軍団。

開戦で雪崩れ込んできたゴブリンは六百に達する。そこに更に四百もの後詰めがいたのだ。

連戦に誰もが疲弊し、呪文や奇跡も残っていない。その状態で敵の増援と戦うのは厳しい。

「と、あぁーっ!!？」

だが、絶望を打ち砕く希望が冒険者にはいる。草原を埋め尽くす醜い小鬼共を太陽が吹き飛ばす。冒険者の最高位——白金等級。聖剣を振るう勇者がゴブリンの蛮行を許しはしない。

この牧場は彼女にとつて第二の故郷であり、ゴブリンスレイヤー達は家族だ。家族の危機に彼女が戦わないわけがない。

ゴ布林といえど五百を超える軍団に襲われ、百にも満たない冒険者の被害が驚くほど少ないのは勇者がゴブリンの大半を一手に引き受けたからだ。

最も戦っているはずの彼女は汗一つかかず、余裕だ。伝説に導かれた勇者は、正しく無敵。

「おっとー」

迫る熱線を聖剣で打ち払う。《分デイスインテグレート解》の呪文。光速をどうやって捉えているか疑問だが、そこは勇者だからと納得するしかない。

問題は《分解》を使った敵だ。これほど高位の呪文をゴ布林シャーマンが使えるはずがない。小鬼將軍ジエネラルや小鬼巨人ギガンテスに匹敵する強敵がこちらにも現れた。

体格は普通のゴ布林と変わらない。しかし、身につけたローブやアクセサリーは全てが魔法の道具。手にした杖もそこの呪文遣いが持つものより遥かに上質だ。

何より知性に溢れる瞳が、その頭にどれだけ邪悪な知恵が詰まっているのか教えてく



る。おそらくゴ布林シヤーマンの上位種だ。

「GBOB! GOROBGRB! GOROBG!!?」

敵が呪文を叫ぶ。呼応するように草原を血に染めるゴブリンの死体が、起き上がった。

生きていた訳ではない。その証拠に首がない死体や真つ二つにされた死体までも動き出している。

邪悪な呪文によってあの世から呼び戻された小鬼動死体。殺された恨みを晴らそうと冒険者に牙を剥く。

「亡者を操る……? 死人占い師か!」

ゴ布林ネクロマンサー

ネクロマンサー

ヘキサグラム

小鬼死霊遣い。ネクロマンサーは六小鬼の中では珍しく、実験や敗北でなく自らの意志でダンピールの配下に加わった変わり種のゴ布林だ。

ダンピールの配下になる前から、自力でネクロマンサーに至っていた彼は強者の死体を求めていた。そして様々な上位種を生み出すダンピールの元ならば幾らでも死体が手に入り、ダンピールは扱いの困る死体処理を任せられる。利害関係が一致した結果だった。

ただネクロマンサーはダンピールもいずれば殺し、その死体を利用しようと企んでいるが、それにダンピールは気づいていない。

そしてネクロマンサーの危険性を冒険者はよく理解していた。そこらの邪悪な魔術師とは格が違う。

ネクロマンサーは死体を操る。墳墓を暴けば、亡者の軍勢を生み出し、国を滅ぼしかねないほどだ。

そしてここは戦場。ゴブリンの死体は幾らでもある。ゴブリンネクロマンサーがいる限り、ゴ布林軍は不滅だ。何度でも蘇る不死の軍団と化す。

「だったら、真つ先に潰すだけさー！」

だが、その程度で勇者は臆さない。呪文を紡ぎ、《火球》を連発する。まだまだ余力を残す彼女にとって二、三回の呪文は問題ない。

しかし、迫る《火球》にゴブリンネクロマンサーは不敵な笑みを浮かべ……地面から飛び出した巨大な手に《火球》は阻まれた。

それは腐食し、所々骨が剥き出しになった死者の腕だが、あまりにも巨大だ。天に伸ばした腕だけでも小鬼巨人に並ぶほどの高さがある。

地面を押しわけ、それが姿を現した。現れたのは醜い顔を腐敗でより醜悪にしたゴブリンだった。

背丈は小鬼巨人の二倍以上。吐く息から腐臭が漂い、鼻がおかしくなりそうだ。規模があまりにも巨大だがこれもまたネクロマンサーによって蘇ったゴブリンゾンビ小鬼動死体だ。

「大きいだけのゴ布林なんて怖くないよ!!?」

太陽の爆発！ ゴ布林ゾンビの片腕が爆散した。巨人だろうとゾンビだろうと変わらない。魔神王さえ倒した勇者に倒せぬ道理はない。

だが、ゴ布林ゾンビは動じず、ゴ布林ネクロマンサーも余裕の笑みを浮かべる。それに勇者は疑問を抱き、答えはすぐに出た。

爆散したゴ布林ゾンビの腕が、肉片が集まり、再生していく。否、あれは肉片ではなく何百ものゴ布林ゾンビが群がり、腕の形を成していつている。

超巨大ゴ布林の正体は、ゴ布林ゾンビの集合体。ネクロマンサーが操る死体でありながら、ヘキサグラム六小鬼に数えられるゴ布林レギオン小鬼群体である。

その最大の特徴は『個にして群』であること。群体ゆえに《タインアンデッド解呪》で地に還すことができるのは一、二匹程度。数千もの死体が集まったゴ布林レギオンには何の支障もない。

更に肉体を構成するゴ布林ゾンビ全てが本体であり、失つて問題ない分体だ。頭を失おうが心臓を壊されようが、急所など存在しないゴ布林レギオンは倒せない。その上、蘇ったゴ布林ゾンビも取り込み、巨大化を続けていた。

しぶとさだけなら魔神王を超える。ゴ布林レギオンでは勇者に勝てないが、逆に勇者ではゴ布林レギオンを殺しきれない。

元より目的は時間稼ぎ。勇者を抑えておけば、冒険者をゴブリンの物量で始末できる。そして小鬼將軍や小鬼巨人と合流し、全軍で持久戦に持ち込み、疲れ果て動けなくなった少女を犯してやる。それを思い浮かべゴブリンネクロマンサーは舌舐めずりした。



「ロード？ 馬鹿馬鹿しい。お前は、ゴブリンだ。ただの薄汚いゴブリンに、過ぎん……！」

戦場から離れた森の中。ここで一つの決着がつこうとしていた。

戦場を逃げ出したゴブリンロード。しかし、その考えを読んでいたゴブリンスレイヤーに待ち伏せされ、息絶えようとしていた。

女神官が作り出した二枚の《プロテクション聖壁》に挟まれ、動けなくなったロードを真銀ミスリルの刃が貫く。

「そして、俺は……ゴブリンスレイヤー……小鬼を殺す者だ……！」

小鬼の王は絶命し——敵を仕留めた一瞬の隙を突かれた。

「《風ウエントス……ルーメン……光リベロ……解放!!?」

《核撃》フュージョンブラスト その威力は山を消し去り、最高位の竜でもなければ形を保てずに消失する。

襲撃者は只人たった二人に万物の根源たる力を揮う禁術を何の躊躇いもなく行使した。

いや、元より千のゴブリンを使い捨てにしているのだ。禁術くらい出し惜しみはしない。最大の呪文で確実に殺すくらいが丁度いい。

「同感だよ、ゴブリンスレイヤー。ロードなんて小賢しだけの同胞……お前を誘き出す餌ぐらいの価値しかない」

闇より現れた吸血小鬼ダンピール。木々も花草も、全てが消失した更地で、眩きに応える者はいなかった。

## 五ゴフ

## ゴブリン5

敵の首魁を倒したと気が緩んだ瞬間に禁術をぶっ放した。これでゴブリンスレイヤー、あと女神官神官も消し飛んだ。今後の憂いがなくなったと喜んでいたら……生きてた。

ゴブリンスレイヤーが女神官を庇うように倒れ伏していた。無事とは言い難いが五体満足だ。いや、おかしいだろ。なんで生きてんの？ 二人まとめて消し去る威力があつたんだが……。

答えはすぐにわかった。おそらくロードを拘束していた二枚の《聖壁》、それからもう一度《聖壁》を唱えた三重防壁、あとロードも肉壁にして耐えたようだ。防ぎきれなくても威力を軽減させることは可能だろう。

それでも女神官を庇ったゴブリンスレイヤーは革鎧は燃え、鎖帷子は溶け、全身重度の火傷と酷い有様だが。

まあ、一撃しのいだところで関係ない。始末するけど。

「ひっ……だ、誰ですか……？」

「毎回聞かれるな。見てわからないか？ この尖った耳、緑色の肌……どう見たってゴブリンだろ」

魔剣を抜き、ゴブリンスレイヤーもろとも斬り捨てようとしたから……白木の杭が胸に突き立てられた。

ゴブリンスレイヤーだ。死んだフリをして襲撃者の隙を窺っていたらしい。

だが、残念、効かないけど。魔神王と勇者との戦いで真銀ミスリルの鎧ミズリルが全損して防具をつけていないが、鋼より硬い不死身の肉体は健在だ。木製の杭が刺さる訳がない。

そもそも俺は吸血鬼じゃなくて、ゴブリンの亜種だから白木の杭に意味はない。対吸血鬼用の武器なんて俺と戦うことを想定していたようだが無駄無駄。

てか、瀕死の火傷だったのになんでピンピンしてるのかと疑問に思えば、《蘇リザレクシオン生》が込められた護符アミュレットなんか持ってた。

何でこんなレア物を？ ゴブリンの巣穴に落ちてたか？ 欲しかったが残念ながら使い捨てでもう使えないな。

だからもう死ね、ゴブリンスレイヤー。杭を砕き、ゴブリンスレイヤーの頭を鷲掴みにする。片腕で宙吊りにした。万力のような握力で握り潰そうとして……。

——腕が斬り飛ばされた。

ゴブリンスレイヤーと俺の間に割り込んだ黒髪の少女。聖剣を振り下ろした彼女は

嫌というほど見覚えがあつた。何でお前がここにいる。

「勇——」

「お兄ちゃんから、離れろおーっ！」

細腕とは思えない巨人のような怪力で殴り飛ばされた。お兄ちゃん？ ゴブリンスレイヤーが？ そんな設定知らないぞ。

ともかく勇者には勝てない。俺は即座に逃げることを決めた。まあ、相手は逃す気はないようだけど。

「夜明けの、一撃イツ!!？」

太陽の爆発！

聖なる剣が放つ、翠玉色の輝き。

「竜殺しの、一撃イツ!!？」

稲妻の轟音！

伝説の魔剣が放つ、紅玉色の呪い。

威力は互角。相殺し、余波が破壊を撒き散らした。

勇者が滅茶苦茶睨んでいる。手を抜いたら死ぬから本気を出す。……逃げるために！

「《血に飢えた吸血鬼ドラキユラよ、その渴きを満たし、血に酔い狂え》」



《紅血》スカーレット。双峰が血のように真っ赤に、全身の血管が浮き上がり、赤黒く輝いた。

血の暴走。吸血鬼の奥の手。膂力や治癒力が大幅に上昇し、更に吸血鬼固有の奇跡限定で威力を跳ね上げる。その力は魔神王に勝るとも劣らない真祖に近い。

ただし、並の吸血鬼では数分で力を使い果たし、灰になってしまふ諸刃の剣だ。元より長期戦は不利。出し惜しみはせず、全力で切り抜ける。



結論から言うと負けた。何なのアレ、パワーもスピードも出鱈目で、こっちの攻撃はひよいひよい避けられた。全て勘で避けたらしいから、どうしようもない。

何とかゴブリンスレイヤー達を盾に勇者に大技を撃たせずに、俺の攻撃は直線上にゴブリンスレイヤー達が入るようにして避けられないようにしてギリギリ渡り合えた。

それでも勇者は強過ぎた。《極刑》カズイクル・ベイは薙ぎ倒されるし、《核撃》フュージョンブラストは斬り裂かれるし、その隙をついて背中をバツサリ斬つてやり、魔剣には巨人でも数秒で死ぬ即効性の致死毒が塗つてあったのに平然としていた。もはや只人かも疑わしい。

勇者の呪文は、威力も高く連発もできるが俺の不死身の肉体を傷つけるほどではないから問題ない。問題なのは聖剣だ。あれは防げないし、勇者が目で追うのがやっとの速

度で振り回すから避けるのもままならず、何回も斬られた。

何が言いたいかと言うと勇者は超チートだった。

上半身と下半身が泣き別れして、そんな事を考えられる俺はある意味余裕がある。てか、上半身だけでも傷が癒えるんだから俺の身体も大概チートか。

それから衝撃の新事実が発覚した。俺、むかし勇者に会った。かつてゴ布林スレイヤーと遭遇した開拓村。あの時、頭を焼いてくれた小娘が勇者だった。

道理で恨まれてるはずだ。故郷を滅ぼした元凶だからね。で、ゴ布林スレイヤーに助けられて牧場で暮らしていたと。……チートな超勇者とゴ布林絶対殺すマンが義兄妹？ 何その最悪の組み合わせ。原作ブレイクにしても限度がある！ 神様はそんなに俺を殺し……いや、これに関しては自業自得か。

生き延びたのは剣聖吸血鬼と妖精吸血鬼が助けてくれたからだ。留守番の二人が何で居たからという、俺がどこか抜けていそうで心配だったらしい。

まあ、無様を晒している時点で言い返せない。思えば真っ先に逃げたロードが一番利口だったかもしれない。

吸血鬼と化した剣聖に動揺し、隙を突いた妖精吸血鬼が超遠距離狙撃した矢で勇者が負傷。その後は《<sup>ゲート</sup>転移》で逃げた。

しかし、勇者もかつての仲間が相手じゃまともに戦えないか。いい事を知った。勇者

と遭遇したら剣聖吸血鬼を積極的につつけよう。

それにも再認識したが……。

「……………ゴブリンってやっぱり弱いな」

牧場を襲ったゴブリン軍は全滅した。千匹もいて数十人の冒険者に負けるとは。勇者がいたとはいえこれは予想外。

更に誤算だったのは六小鬼まで全員倒されたことだ。

小鬼群ゴブリンレキオン体は小鬼死靈遣いゴブリンネクロマンサーもろとも勇者に跡形もなく消し飛ばされた。ネクロマンサーを失ったことで蘇った小鬼動死体ゴブリンゾンビも死滅した。

小鬼巨人は槍使い、魔女、妖精弓手、蜥蜴僧侶、鉄人道士の銀等級冒険者五人を相手取りながら最も冒険者を殺したが最後は槍使いに仕留められた。

小鬼将軍は重戦士二堂パーティと互角以上に渡り合ったが、重戦士と相打ちになって果てた。

手塩にかけて育てた六小鬼ヘキサグラムでさえ戦果は銀等級を含めて冒険者十数人。これだけ鍛えても所詮、ゴブリンではこの程度か。

多分、吸血鬼になってパワーアップした剣聖吸血鬼と妖精吸血鬼の方が強いんじゃないか？ 剣聖吸血鬼は勇者と互角に打ち合ってたし、妖精吸血鬼も勇者を射抜いて見せた。……というか。

「別に下半身は持って帰らなくてもよかったんだが……」

「もし治らなかつたら、どうするんです。夜伽の世話もできなくなりませう」

「それは聞き捨てならないわ。一番は最初に吸血鬼にして頂いた私よ」

「——もう少し恥じらいを持って！ お前ら、処女だろうが!!？」

俺は知っている。どれだけ妖美な女を演じたところで、こいつら未体験の生娘だつて。吸血鬼は血の味でわかるんだよ。まったくいい歳して処女なんて笑い話だ。俺は経験ある。十年くらい前に襲った村娘が初めてだったけ？

……あ、待て。そんな怖い顔で迫らないで。わかつた。話せば分かる。だから……ズボンに手をかける！ 生まれ、主人の言うことを、あぁ——っ!??



戦争は終わった。牧場は無事でゴブリンは全滅。冒険者の勝利と言えるだろう。

だが、勝鬨が上がることはなく、勝利の宴が開かれることもなかった。

冒険者ギルドに戻った彼らは誰もが力無く倒れこみ、葬式のような重苦しさが支配していた。

誰もが傷つき、疲れ果て、勝利と呼ぶには失ったものが多過ぎた。

ゴブリンスレイヤーの呼び掛けに応じて集った冒険者。生還したのは半数だけ。辺

境の街を拠点にする数多の冒険者たち、その内の半分がゴブリン相手に命を落としたのだ。

街中の冒険者が集まり、白金等級までいる。ボロい稼ぎと思いきや、意気揚々と馳せ参じた冒険者を襲ったゴブリンの大軍団。想定を遙かに超えた圧倒的な数、そしてゴブリンとは思えない強大な怪物たちに冒険者は苦戦した。勇者がいなければ全滅していたのは冒険者かも知れない。

とても勝利とは呼べないよくて痛み分けだろう。

「おいつ、目を覚ませ！ 寝ているだけだろ!!? 王様になるまで死ねないと言っていたじゃないか!!?」

「落ち着いてください!」

「そうです! この人はもう……」

「うわああああああああああつ!!?」

女騎士の慟哭。寝かされた重戦士に縋り付く。どれだけ泣こうと彼が起きることはない。いままで戦った怪物の中でも一、二を争う強敵、小鬼將軍との激戦の果てに彼は命を落とした。

全身全霊を尽くした末に相打つ。冒険者の死に様としては幸運だったのか、相手がゴブリンで不運だったのか。それは重戦士にしかわからない。

「痛てて……………」

「とうぶん、冒険は、なし、ね」

「はんつ、これくらいすぐに——痛つ、傷口を突くな！」

槍使いも大怪我を負った。小鬼巨人が死を悟った瞬間、槍使いだけでも道連れにしようとなんと拳を繰り出したのだ。直撃こそ免れたものの只人が受けるには重すぎる一撃だった。冒険者家業はしばらく休業になるだろう。

傷口を触る魔女も意地悪をしているのではなく、体を大事にしてという彼女なりの愛情表現だ。

「……………どうしてこんなことに」

冒険者ギルドに満ちる嘆きと悲しみに女神官は眩く。彼女はゴブリンに仲間を全滅させられた。だから、ゴブリンの恐ろしさを知っている。ただどこまで悲惨な結末になるとは考えていなかった。

「俺の見通しが甘かった、群れの規模を見誤り、多くの冒険者を犠牲にした」

「違うよ、お兄ちゃん！ あいつが、あいつが全部仕組んだことだよ!!？ あいつは最初からお兄ちゃんを狙ってた！ そんなの誰にもわからないよ！」

「それでも、俺が呼び掛けなければ彼らは死ななかつた」

ゴブリンスレイヤーは冒険者を巻き込んだことを後悔していた。ダンピールの狙い

が自分だと知らず、大勢を死なせ自分は勇者から貰った護符のおかげで平然としてい  
る。

勇者が悪くないと言おうと彼は自分が許せなかった。

「あの、ゴブリンスレイヤーさん。……あれは……あのゴブリンは、なんなんですか？」  
女神官はおずおずと問う。ゴブリンスレイヤーと勇者以外でダンピールを目撃した  
彼女だけ。その存在を知ったたからこそゴブリンだとは思えなかった。

只人に酷似した容姿。流暢に共通語を話せる知性。勇者と互角に渡り合う戦闘力。  
いまでも瞼を閉じれば鮮明に思い出せる。あの恐ろしいゴブリンの姿。

勇者とダンピールの戦いは速すぎて女神官には消えては突然現れるようにしか見え  
なかったが、剣を打ち合うだけで轟音が響き、衝撃が大気を震わせる。

次元の違う呪文の応酬。雷撃が走り抜け、業火が燃やし尽くす。杭が剣山のようにそ  
びえ立ち、死の熱風が吹き荒れる様は天変地異を目の当たりにしたようだ。

まさに神代の戦い。かつて起きた混沌と秩序の神々の戦いはあのような凄まじいも  
のだったのだろうか。

「……ゴブリンだ。吸血鬼の力を得て……あの異常な硬さは、おそらく別の怪物の力も  
得ているな……吸血鬼を想定して用意した武器も無駄だった」

「……吸血小鬼<sup>ダンピール</sup>つて上位種さ。巨人の膂力や不死の治癒力を持つてる。あの頑丈さは

『不死身の肉体』だと思う。竜殺ドラゴンスレイヤーしが手に入れる不死の祝福にして呪い。……そしてボクの故郷を滅ぼしたゴブリンだよ」

予想を超えた勇者との因縁。そして力の凄まじさに女神官は絶句した。

ドラゴンと吸血鬼。世の中で最も有名な怪物だ。知名度もさる事ながらその強大さは知れ渡っている。

その強大な力を得たゴブリンが存在することに彼女は恐怖した。

「……………」

冒険者ギルドの片隅。妖精弓手は手に持ったものを見て、呆然としていた。

「どうして……………」

それは一本の矢。鏃は芽、矢羽は葉。鉄を用いない森人が使う矢。だが、その矢に彼女は見覚えがありすぎた。

「どうして、これが……………」

これは勇者を射抜いた矢だ。その矢に見覚えがあつた妖精弓手が譲り受けたものだ。

「これは……………」

でも、いまでも信じられない。この矢の持ち主は死んだはずだ。彼女の故郷とともに。それでも見間違はずがない。

「これは、姉様の……………」



故郷の悲劇からまだ一ヶ月も経たず、悠久を生きる森人にとっては瞬きするような時間だ。

最初は信じられず故郷に戻り、全てが焼け落ちた惨状を目にしてようやく現実を受け入れた。あの時、ゴブリンスレイヤー達が支えてくれなければ彼女は立ち直れなかつただろう。

死んだと思っていた大好きな姉。生きているかもしれないという希望と、何故勇者を射抜いたのかという疑問。

「どういふことなの、姉様……？」

生きていたのは嬉しい。でも、勇者を射ったということは敵になってしまったのか。あの気高き姉が何故、混沌に与ってしまったのか。そもそも本当に姉の仕業なのか。

答えは見つからず、彼女の心に不安が広がっていく。